

一〇一五年三月一四日

ロゼットの日毎膨らむ春の庭
前庭の摘むには惜しき落の薹
咲満ちて化身のごとく梅真白
坂がかる異人館街花ミモザ

一〇一五年三月一三日

雨晴れて綺羅をはじける春野かな
花菜畠あたりをはらふ明るさよ
うららかや遠まなざしの太子像

一〇一五年三月一二日

虹色に点る架橋の灯の朧
産声や春あけぼのの牛舎より
灯屋てふ屋号を掲げ春ともし
松蟬の聴き入る程に声揃ふ

一〇一五年三月一二日
茹で上げて磯の香に満つ茎わかめ
点描のごと田を埋む花なづな
春寒し老舗書店も閉ずと札

御手洗は苔むす岩や水温む
春奏づ疏水にかかる太鼓橋
雛の日の子らダンスする陣屋跡
水甕にゆらゆら遊ぶ春日かな

澄子 千鶴 わかば 千鶴 わかば 康子 わかば もとこ もとこ むべ むべ むべ むべ むべ むべ

一〇一五年三月九日

若人のスースの硬さ春の風
夕焼雲送電塔の天辺に
チャペルより洩るる贊美歌春の昼
かまきりの卵に躊躇庭鉄
車椅子椅子寄り添ひて野に遊ぶ

一〇一五年三月八日
トンネルをなして芽を吹く並木道
風花をエスケープして汁粉食ぶ

毎日句会みのる選・一〇一五年三月一七日

康子 せいじ あひる 澄子 むべ むべ むべ むべ むべ よし女 明日香 澄子 あひる